
Melissa

たっぱ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M e l i s s a

【Nコード】

N 4 1 3 9 E

【作者名】

たっぱ

【あらすじ】

ポルノグラフィティの“メリッサ”を元にした願いを叶える少女のお話です。

この作品はポルノグラフィティの“メリッサ”を元にした作品です。何か問題がある場合はお知らせ下さい。

空を見ていた。

明日があるはずの空。

陽が昇り晴れていく空。

なのに。俺の心は迷うばかりで、あの空みたくななりそうもなかった。

要らないのに。欲しいモノはこんなじゃない。なのに、俺はソレばかりを持て余していた。

ふと、荒涼の地を眺めた。共に歩み進んでいた傍らのトリが羽ばたき、そして飛び立った。

どこかにヒカリを見つけられたのかな？　俺がどんなに探しても見つけだせないヒカリを。

「なあ。お前の背に俺を乗せてくれないか？」

そしてさ。どこよりも、何よりも、ずっと、一番高い所で置き去りにしてくれよ……あの優しさから遠ざけてくれよ。

そうすれば、きっと――

「――オマエの願いは叶う」

「?!」

不意に羽ばたきとは違う音が耳に届いた。儚く。鋭く。俺を突き刺す声。

いや違うか。本当は澄み切ったキレイな声なんだ。でも俺はなぜだかそれを、怖く感じた。

だって俺に話しかかれる人間なんて、いないはずなのだから。

「ふふ、驚いているな。なに、気にすることはない。私はそういう

存在なのだ…… オマエがどんなナリをしても、私には関係ない」
空色の髪を持つ女の子が微笑みを絶やさず続けた。

「さて…… オマエの願いはなんだ？」

「願い？ 俺の願いを叶えてくれたりするのか？」

ほんの冗談混じりの戯れ言。なのに彼女は、

「よくわかったな。その通り。オマエの願いを一つ叶えてやろう」
そう答え笑った。

何を言っているんだ彼女は？……というのが第一印象。

次に思ったのは、そんな非科学的なことを信じると思うのか？…
…だった。って俺も非科学的な存在か。

それにしても、俺の願いを叶える、ね。

信じられる？ 信じられない？

わからないな。 いや、信じられないと思うのが普通か。そう思
わないあたりやはり俺は変わり者なのかもしれない。

もし。もしも彼女が言うことが本場で、願いを叶えてくれるなら
喜べる…… いや、喜ぶたい。

だから恥ずかしさをこらえて、言った。

「君の手で切り裂いてくれ。この、脳裏から焼き付いて消えてくれ
ない、遠い日の記憶を」

「記憶？」

「ああ。泣きたくないのに泣いてしまう。涙がこぼれてしまう悲し
みの記憶…… もうイヤだ。泣きたくないんだ。笑っていたんだ。だ
から…… 悲しみの息の根を止めてくれよ」

「…… 愛に焦がれた胸を貫け、と。ふふっ、カノジョ想いのヤツだ
な」

彼女は小さく口を開いて笑った。

驚いた。

だって俺は記憶の内容を言っていない。

なのに彼女はそれが“カノジョのこと”だとわかった……この子
は本当に特別の力を持っているのか？

そう思うにつれ、期待は次第に増していった。それも自覚の無いまま。

しかし淡い期待は打ち砕かれた。

「その願いは叶えられないな」

「な、どうして！願いを叶えてくれるんじゃないのか！」

「ああ。確かに言ったな……だが私には全ての願いを叶えるチカラなんて無いんだよ。限られたもののしか、な。特に傲慢なやつと他人様のココに関わることはキライだ」

そう言っただけで彼女はつんと人差し指で俺の胸をつついた。優しく、何かを崩していくように。

「願いを変えろ。それがムリなら諦めろ」

俺は淡々と言う彼女に苛立ちを覚えていた。

叶えると言っただけで、それは叶えられない、だって？　なら初めから願いなんて聞くなよ。願いつてのは易々言いふらせるもんじやないんだよ……といった風に。

しかしそう考える一方、新たな願いを探していた。

どこにあるのか、本当にあるのかすらわからないそれを探していた。

そうしている内にトリを見送った空は夕闇に変わっていった。地を這うばかりの俺をただ優しく風が撫でる。

……そうだな。あのトリみたいに空を飛んでみたいな。

羽が欲しいとは言わないさ。ただ飛ぶだけでいい……せめて宙に舞うメリッサの葉みたいにな。

そうやって、ずいぶん立ち尽くしてみたけど……いや。立ち尽くしたからか、一つの結論に至った。

多分答えはないのだろう、と。

実を言うと、先刻、彼女に言った願いは不安定で歪なものだった。ただ、楽になるためには、と考えその答えを言っただけだった。

ただし、“カノジヨのこと”は俺の胸に確かに存る。ただそれをどうこうしたいとは思ってはいないのだが。できるものとも思わな

い……願ってはいけないことなんだ。

だから、俺に願いはない。この風にも行くあてなどないように。

——そうだ。

俺の手であの記憶に錠をかけよう。

アレがなければ俺に願いが無くてもおかしくない。

躊躇いなどないだろ？

間違っても、二度と開くことの無いように。この手で。

うん。そうだ。早くそうしよう。

さあ、錠の落ちる音で終わらせよう。

「そろそろ、決まったか？」

カノジヨとの楽しかった時間も。

彼女との奇妙な時間も。

初めから何も無かったかのように忘れてしまおう。

「いや、決まらない。それより、もういいよ。無いんだ。初めから、今の俺に願いなんて」

ふつつと湧き上がってくる感情にまかせ吐き出すように彼女に伝える。

「いや。要らない、のかな？ 叶えたところで何も得るものなんて無くて、逆に失っただけな気がするんだ」

そんな俺を見ながら彼女は見事な沈黙を作り上げていた。

「ただの怖がりで強がりなのかもしれないけど、それでもやっぱり願いはない」

「……………」

「だから記憶を無かったことにして俺の全てを終わらせる。だから君はもういいよ。色々ありがとう」

「——言いたいことはそれだけか？」

そして壊した。

「何を考えているかは知らないが、そもそも私は願いを叶えるために現れる者だ。だから願いを叶えなければ帰れない」

紅く膨らみを帯びた唇に指を伝わせ、笑みを僕に向ける。プレゼ

ントを見つけた子供と異性を誘う大人の入り混じったような雰囲気だ。

「だから言っておこう。オマエの願いは——オマエがどうすべきかを見つけることだ」

そしてその口から告げられた。

「……どうすべきかを見つける？」

「ああ。今のオマエは文字通り地に足がついていない存在。それは自分自身の行く末を把握出来ていないからだ。ならばそれを提示してやればいい。ただそれだけだろ」

「なら、俺はどうすればいいんだ？」

「ん。そうだな。いっそのこと全てを水に流してしまうのはどうだ？……トリのように空を飛んで、だな。ある意味お前の“記憶に鍵をかけること”と同じだ」

また彼女は俺の思考を読んだ。今度はさして驚かなかった。

それよりも、

「早く、早く俺を導いてくれ。救ってくれ」

いち早く救われたかった。

「わかった」

ゆっくり彼女の手が俺の胸に触れる。先ほどとは違い子供をあやすように優しく。その手は温かった。

そして、俺が変わっていく。

それが気持ちよかった。

「一つ言っておこう」

彼女が儚げな瞳を向けた。

「私は救済者ではない。先導者でもない。ただヒトの願いを叶えるだけだ。そしてオマエには願いが無い。それがどういうことか分かるな」

彼女は俺に理解させた。

「救いのないオマエの魂をカノジヨの願いが救いにきた」

俺はカノジヨを心配させていたんだ、と。

「…ありがとう」

「間違えるな。それを言うのはまた後で、だ」

そう言っただけはきれいに笑った。

救いのない魂は流されて消え行く。

願いのある魂は果たされて迎え待つ。

そして、消え行く…旅立ちいく瞬間にわずかに光る。今から届く

そうやって、

「ヒカリまで持っていてしまうのか。つくづくな傲慢なやつだな、オマエは」

今、月が満ちる夜を生み出すのさ。

（F i n）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4139e/>

Melissa

2010年10月8日15時06分発行